

土木 × 建築 × 異分野のコラボレーション

— 交流から考え, 生まれる日本の未来 —

[第1部]

基調講演 **内藤 廣** 氏 (建築家・東京大学大学院教授)

[第2部]

ディスカッション 「土木と建築の連携を考える」
コーディネーター 柴田 久 氏 (福岡大学准教授)

2007.12.4 (TUE) 18:30-20:30

福岡大学 A棟 2F A201 教室 入場無料 (先着 250名)

主催 KYUSHU LANDSCAPE WORKSHOP 事務局



内藤 廣 Hiroshi NAITO
建築家・東京大学大学院教授

1950年 神奈川県横浜生まれ
1974年 早稲田大学工学部建築学科卒業
1974-76年 早稲田大学大学院にて吉阪隆正に師事、修士課程修了
1976-78年 フェルナンド・イゲラス建築設計事務所勤務(マドリッド/スペイン)
1979-81年 菊竹清訓建築設計事務所勤務
1981年 内藤廣建築設計事務所設立
2001年 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学助教授
2003年 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学教授

土木 × 建築 × 異分野のコラボレーション

— 交流から考え、生まれる日本の未来 —

□九州ランドスケープワークショップの開催にあたり

1. 公共空間整備の際、土木・建築・造園・都市計画・歴史・まちづくりなど、幅広い分野について検討・配慮が求められ各専門分野の連携が必要とされているが専門を超えた議論の場が少ない。
2. 全国で土木、建築、造園など多方面の学生らによる興味深い活動行われている。また、学生が専門を超えた教育を受け、考える場が少ない。

上記のような問題意識のもと、九州内各地を中心に全国で様々な分野を学んでいる学生を対象に、ひとつの会場に集結し、専門家との議論や同分野・異分野の学生同志が議論し、考え、異分野とのコラボレーションを体験する場を提供すべく、学生主体で『九州ランドスケープワークショップ』を企画した。

本企画の目的は、分野の枠を超えて九州さらには全国において活躍する人材を育成する場を与えることである。また、このような企画を通じて共感できる仲間を見つけ刺激しあい、そのネットワークが九州内外に広がっていくことは、これからの九州・全国の美しい風景を守り、育てるきっかけとなり、新たな文化価値を生むための大きな力となるはずである。また本企画が、各専門分野の抱える問題や、学生が将来関わるであろう業務の一助になるようなものにしたい。

第1回では、学生が中心となった事例発表会を行った。そこで今回は、建築、土木のフィールドで活躍しておられる専門家をお呼びし、学生が、専門家に触れる機会を企画する。

建築、土木のフィールドで活躍される専門家として、内藤廣氏をお迎えする。内藤廣氏は、建築家であるとともに、東京大学大学院工学系研究科社会基盤学教授でもあり、建築の分野から土木の分野へと活躍の舞台を広げられている。学生は専門家に実際に接することで、多くのことを感じるとともに多くを吸収し、これからの活動につなげてもらえれば幸いである。

この企画の開催にあたり、問題意識に賛同し貴重な事例を発表いただいた方、また、快く講演をお引き受けいただいた内藤廣氏、開催準備をともに頑張っていたいただいた方、チャンスをごくださった福岡大学には、よりいっそうの感謝を申し上げる。会場で、活発な意見交換が行われることと今後、このような場が自然発生的に全国で多発していくことを期待している。

代表 坂口浩昭

□第1回ダイジェスト

『土木 × 建築 × 異分野のコラボレーション—交流から考え、生まれる日本の未来—』の第一弾として、学生を中心としたワークショップを8月31日(金)に開催した。当日は、九州大学、九州工業大学、熊本大学、福岡大学などの学生が、パネリストとして参加し、日ごろ自分たちが手がけている土木や建築に関する活動の事例発表を行った。ゲストクリティックとして、藤村龍至氏(藤村龍至建築設計事務所主宰)、柴田久氏(福岡大学准教授)も参加し、学生の事例発表に対し、専門家の立場から様々な意見やアドバイスを述べていただいた。ここでは、分野のコラボレーションとともに学生同士のコラボレーション、学生と専門家のコラボレーションなども目的としている。フリーディスカッションなども行われ、学生には良い刺激を受ける場や情報交換の場となったのではないだろうか。



□プログラム

日時：2007.12.4(TUE) 18:30-20:30

会場：福岡大学 A 棟 2F A201 教室

参加者：先着 250 名(申込不要,参加費無料)

opening-----18:30-18:40

session 1-----18:40-19:30

基調講演 内藤 廣 氏(建築家・東京大学大学院教授)

session 2-----19:40-20:30

ディスカッション「土木と建築を考える」
コーディネーター 柴田 久 氏(福岡大学准教授)

□問い合わせ

KYUSHU LANDSCAPE WORKSHOP 事務局

(福岡大学工学部社会デザイン工学科 景観まちづくり研究室内)

担当：坂口浩昭

住所：〒814-0180 福岡市城南区七隈 8-19-1

TEL：092-871-6631 FAX：092-865-6031

E-MAIL：td064009@cis.fukuoka-u.ac.jp

URL：http://www.tec.fukuoka-u.ac.jp/tc/

□アクセス

1. 福岡大学へのアクセス方法

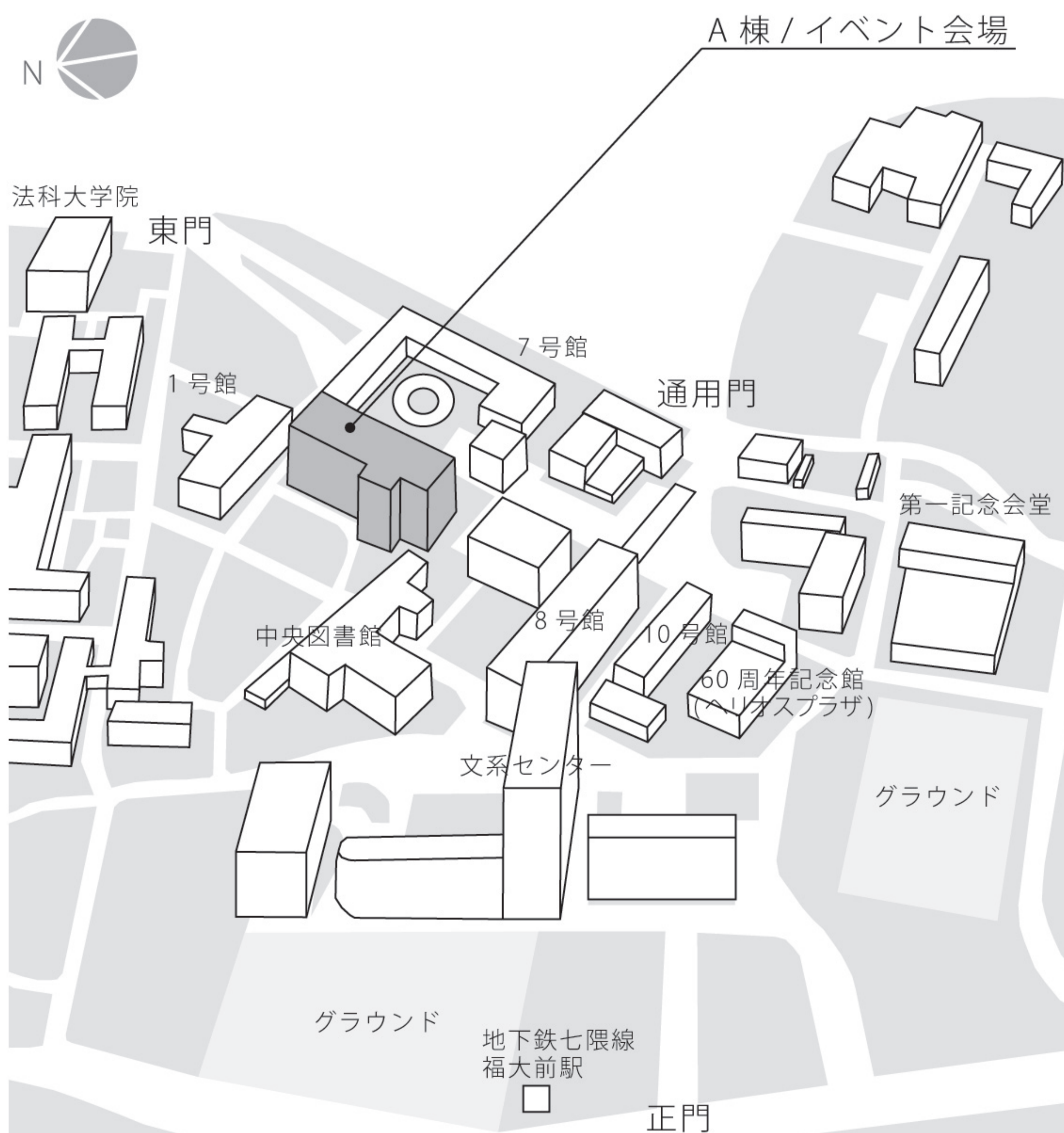
JR 博多駅から地下鉄空港線天神北駅(6分)下車後、

七隈線天神南駅にて乗換え福大前下車

(当日は大変混雑致しますので、公共交通機関をご利用下さい)

2. 福岡大学内キャンパスマップ

A 棟(イベント会場)は 1F の東側と西側に入口があります



土木 × 建築 × 異分野のコラボレーション

— 交流から考え、生まれる日本の未来 —

■ 第2回ダイジェスト

KYUSHU LANDSCAPE WORKSHOP の第2弾では、ゲストとして内藤廣氏（建築家・東京大学大学院教授）をお招きし、学生の知らない現場の生の声を聞く機会を設けた。第1部で行われた基調講演では、現代のアカデミズムや社会情勢の抱える問題に対して学生が何を感じ、今何を学ぶべきか、どのような視野を持つべきかというお話や、建築・土木両分野を経験し、異分野との協働によるまちづくりを積極的に行われているからこそ抱えているコラボレーションの意義、そして何より異分野でありながら同じ目標を持つ者同士が協働して目指すべきまちづくりの姿について、宮崎県日向市におけるまちづくりを事例として紹介しながらお話していただいた。第2部で行われたディスカッションでは、コーディネーターとして柴田久氏（福岡大学准教授）をお迎えし、コラボレーションに関するより踏み込んだ質問や「内藤廣氏の考える美しい風景とは」など、様々な質問を投げかけた。またその後は会場に訪れた学生や専門家から内藤廣氏への質問や意見などを募り、フリーディスカッションの場となった。会場からは内藤氏自身に対する質問や「まちと都市の違い」、「壊れていく風景をどうやって繕って行けばよいのか」、「自分の感じる美しい風景をどのように表現すればよいのか」など答えを出すことが非常に難しい質問も多く、内藤氏だけでなく会場全体が一つの問いに対しての自己の回答を模索するような場面も多くみられた。これらの機会から出た疑問や問題点は、このような小さな範囲に収まりきれないものではないが、今回のイベントに参加した人々の中では共有することができたであろう。そして次はこのような意識共有の場を広め、より多くの人々が同じ問題意識を共有する機会を増やしていくことが重要となるであろう。

■ ゲスト

内藤 廣（建築家・東京大学大学院教授）、柴田 久（福岡大学准教授）

■ 講演内容

土木と建築

100年来、建築・土木間のコミュニケーション（会話）が乏しいものです。それぞれのやっていることを理解せず、互いに違うことを考えています。本来建築と土木という大きな流れがあって、相互を都市がつなぎ合わせる役割を果たすという作図でしたが、その役目はあまり果たせていません。建築と土木において最も異なる点は、建築が住宅などの日常を取り扱う分野であるのに対して、土木は災害などの非日常を取り扱う分野です。この価値観の差は教育カリキュラムに起因しています。建築のまず目指すものは自己実現の提示です。それに対して土木の目指すものは他者の救済です。これらの違いの中で問題なのは、互いに偏りすぎたことにあります。しかし両者の考え方は両方必要であり、協力し合えばより良いものができるのではないのでしょうか。

日本のアカデミズム

明治時代の日本のアカデミズムは最先端であり、大学の先生たちはいち早く西洋のテクノロジーを取り入れ、優秀な学生を育てて社会へ送り出していました。しかし現在は世の中の変化に対してアカデミズムの遅れが目立ち、世の中の要求に答えられていないのが現状です。これは旧来の枠組みが保持され続けていることが原因です。現在の学生は基礎的な工学的知識の勉強と応用的な演習両方をこなさなくてはなりません。建築の基礎は工学であり、その工学のエッセンスを身に着けない人間がいくらデザインをやっても何の意味もないと思います。

コラボレーションについて

篠原修先生がよく使われますが、その言葉は仲良しグループのような印象を受けています。これは一人でもできる人間が集まって互いに協働することで、初めて意味があり良いものができます。だから誰かと協働したいと思うのであれば、まず自分が一人前以上の人間にならうと思ふべきです。そして是非とも強いコラボレーションを目指してほしい。自分も篠原先生と共同するに当たって、土木のテリトリーを理解するために努力し勉強しています。このように互いに努力する必要があり、それなしにコラボレーションはあり得ません。

人口減少時代へ

17～18世紀にかけて世界の人口は急激に伸びています。1950年は私が生まれた年で人口は25億人でした。現在は約63億人です。このように世界の人口は増加し続け、2050年頃には100億人に達するでしょう。一方2005年頃をピークに、日本の人口は減少傾向にあります。これは、人類において未体験のものです。さて、そんな中建築や都市はどうなってしまうのでしょうか。日本の都市は斑模様になり、その現象はデフレスパイラルのように進行し続けていきます。そうすると価値が下がり地価も下落し、何よりも犯罪率が増加する。また網の目のように広がったインフラネットワークは支えきれなくなります。日本の都市構造はシュリンクしていくのですが、そのシュリンクしていく世の中を誰も描いていません。これはみんな考えていかなければならない問題です。

日向市駅

これは篠原先生とのコラボレーションの中で成功した事例として、最初に名前が挙がるものです。12年間まちと付き合う中でこの事業は住民との関わりが多く、その中でまちづくりまで発展させようということになりました。プロセスを通して住民との協働を活かしてまちづくりに繋げようということになりました。日向は杉の生産地として賑わったという歴史を持っていることから、地元住民や行政も杉を使用して駅舎をつくることを懇願していました。当初は杉のような弱い材料で駅舎をつくることに反対でしたが、どうしても杉を使いたいという強い願いに押されて杉を使った駅舎及びまちづくりをしようということになりました。まずパブリックな部分から始めようという事で、街灯などのストリートファニチャーから手をつけました。ストリートファニチャーの材料にも杉を使用しています。普通ならばメンテナンスの不便さを理由に敬遠されますが、日向プロジェクトにおいては住民の方々が自分たちでメンテナンスをやると申し出るなど、公共事業ではあまり見られない住民とのコミュニケーションが生まれました。専門分野の枠を超えて、まちに対して何ができるかを考えることが最大の目標で、専門分野の垣根など極めて小さいものでした。

